2020 年 11 月 15 日 川越教会

子どもという幸い

丸山　勉

[聖書]　ルカによる福音書 18 章 15～17 節

イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。弟子たちは、これを見て叱った。しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

［1］ 神の「祝福」を祈る

今日は「子ども祝福式」を致しました。年に一度、この時期にしています。ようこそ、この礼拝においで下さいました。それは、ちょうどこの礼拝が聖書の言葉にあるように**「イエスに触れて頂くために、人々は乳飲み子までも連れて来た」**と書かれているようなことだと思うのです。そして聖書によると、先ほどのマルコ福音書では**「（イエスは）子どもたちを抱き上げ、手を置いて祝福された」**とあるように、その祝福を受ける、この時だと思うのです。

この「子どもを祝福して下さい」というのは、イエス様の時代も今も変わらない、その子どもの親の、心からの願いだと思うんです。そして**「祝福」**というのはとても尊いものだと思います。英語では**「Blessing」**ですよね。単なる「幸福」と言うより、もっと根本的なもの、もっと大きなものと言ったら良いでしょうか。

皆さんは、子供さんに対して色々なことを願いますか？　才能豊かな子になりますようにとか、皆から愛される子になりますようにとか、色々。……私たちは振り返ってみると、それほど強く「この様になって欲しい」という願いは持たなかったように思います。自分の子供と言っても**全く別の人格**ですし、こうあるべしという願望のようなものを押し付けたいとは全く思いませんでした。その子が自分の人生を色々な選択をしながら歩んで行く、そのサポート役はしなければと思いましたけれども、あとは、親自身自信満々で子育てが出来る者ではないということは知っていましたので、子供たちそれぞれの個性を生きてくれればいいと思っていたように思います。けれども、その中で一つ、「神様がこの子といつも共にいて、祝福して下さい」という祈りはどこかでいつもあったと思い

ます。この**神様の「祝福」**というのは、どのような場や環境にあっても神様が共にいる、ということではないかと思っています。

今日の聖書で、子どもたちが人々に連れてこられ、「乳飲み子」もそこにいたとありますね。もう少し大きな男の子も女の子もいたでしょう。人数は分りません。でも、**そのすべての子どもたちをイエス様は拒むことなく、祝福された**のは間違いないと思います。初めイエス様の弟子たちは、子どもがイエス様に所に連れて来られることにストップをかけました。イエス様を煩わせるな、ここはそういう場ではない、と思ったのでしょうか。これは**「大人の発想」**ですね。**「大人の常識」**。それで妨げた。けれどもイエス様は**「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」**とおっしゃいました。**大人の分別**がここでは退けられているのです。そしてイエス様は**「神の国はこのような者たちのものである」**と言われました。

「このような者たち」。—一体、彼ら（子どもたち）は何かをしたので、イエス様は受け入れて下さったのでしょうか？　何もしていません。彼らがしていることは、**「愛」を受けていることだけ**です。けれど、それが**信仰**なのだと言っているように思うのです。あなたは、**その「存在」として神様に愛されている。**この神様の愛を全ての子どもは受けて欲しい、と。…私は、もしかしたら、ここには健康な子どもたちだけではなかったのではないかと想像しました。病気を抱えた子もいたかも知れないと思います。或いは落着きのない子とか（そういう先天性の病を持つ子等）、ダウン症の子とか、視力や肢体不自由な子だって連れてこられたかも知れません。さらに言うと、他国籍の子、いわゆる性的マイノリティの子、コロナウィルス感染の子たち…イエス様はおっしゃるんです。<u>「わたしのところに来させなさい。妨げてはいけない。神の国はこのような者たちのものである」</u>と。

［2］ 私たちの「命」—

「コウノドリ」という漫画があります。鴻鳥（こうのどり）サクラという産科医師（モデルになっている医師もいるようです）が色々な妊婦さんやその家族に出会い、赤ちゃんの出産を助け、そこで新しい命が誕生していく、或いは、残念な結果になることもある様々なエピソードが綴られているそういう作品です。私は最近その初めの数巻を読んだのですけが、とても感動しました。私たちの命の始まりというのは、大げさでなく、本当に**奇跡の連続**なんだなと思ったんです。

「切迫早産」という話では、順調にいっている妊婦さんに早期破水が起きるのです。原因はよく分からない。高位破水と言って、極端に羊水がなくなる程度の破水はしてはいないものの、赤ちゃんの羊水が少なくなってしまうのです。まずは 24 週、推定体重 500g になることを絶対安静で目指します。そこまでいけば

赤ちゃんは50%の確率で助かる。しかしそんな中、赤ちゃんの心音が落ちてしまいました。まだ23週、看護師は赤ちゃんの事を考えると直ぐにでも帝王切開すべきだと指導医の鴻鳥に連絡します。ところが彼の考えは異なります。今の週数を考えると最終的に赤ちゃんではなく、母体優先でなければならないと。23 週以下での手術はとても難しいのだそうです。「たとえ赤ちゃんの命が助かったとしても、多くの合併症の恐れがあって脳性麻痺や視力障害、慢性呼吸不全が起こる可能性が高いです。よく考えて決めて下さい」と語ります。次の日、二人は覚悟を決めました。10 年目にして与えられた赤ちゃんなのです。夫婦で「俺たちはこの赤ちゃんの味方でいよう！」と、帝王切開を望むのです。…手術は成功します。お母さんも無事。赤ちゃんの体重は 420 グラム。呼吸器をつけられたまま。今後もどうなるか分からない。「こんなにちっちゃいんだ」とつぶやく父親。でもその赤ちゃんに手を触れると、その子が小さな手で握り返してくれるのです。ドラマはそういう選択をしている訳ですが、他の選択だってあり得る訳です。…私は、出産というのは体験がないから分からないのですけれども、本当はとても大変なことなのだなぁ、と思ったんです。新しいひとつの「命」の誕生。これは神様の祝福以外の何ものでもないのだと思います。神様による「命」の創造です。出産というドラマは、それを垣間見せてくれるものなのかも知れません。

私たちは、誰もが**「命そのもの」**として生まれてきました。何の飾りもつけない裸ん坊の存在として誕生しました。例外はありません。聖書の中に生まれつきの盲人がイエス様と出会う話があります。或る時弟子たちが「この人が生まれつき目が見えないのは誰が罪を犯したためですか、本人ですか、両親ですか」とイエス様に尋ねると、イエス様はこう答えられました。「本人が罪を犯したのでも両親が罪を犯したのでもない。ただ神の御業が彼の上に現れるためである」と。(ヨハネ福音書9章)。神様に望まれないで生まれて来た人など一人もいないのです。

［3］ 私たちも「神のこども」

何と、子どもたちというのは、**素直に「愛」を受けている存在**でしょうか。幼な子は愛を受ける天才、親の愛を疑うことを知りません。時々大人の方が恐くなることがあります。幼な子の目にじっと見つめられるんです。そしてこちらがどんなに不十分な存在であろうが、無邪気に親に甘えてきます。親が子供を拒否しない限り、子どもは愛を受けるだけではなく、**素直に愛を表わして**くれ、家庭に本当に喜びを与えてくれますよね。—**「神の国はこのようなものたちのものである」**。

よく考えてみたいと思います。**私たちも「子ども」でいいんです。神様という方の前では。**私たちには人間の親がいるでしょうけれども、もうその親もいないとい

う人や、あまり親のことを考えたくないという方もあると思います。けれど、イエス・キリストは、私たちに**「主の祈り」**を教えて下さって、「あなたがたはこのように祈りなさい、**“天にますますわれらの父よ”**…」と言われました。これは幸いなことだと思うのです。神様は私たちを捨てず、むしろ天にいる父として、私たちとの関わりを喜ばれる方です。「子供の頃はけがれがなかったけれども段々と薄汚れた人間たちは滅びよ」などと言うことは無いのです。聖書が証しする神様はそういうお方ではありません。イエス・キリストは**「疲れた者、重荷を負う者は誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイ 11:28）**と、私たちを憩わせて下さるのです。ここで、子どものようになっていいんです。彼は、**私たちの罪をさえ十字架で引き受けて下さった**お方ですから、何ら飾る必要はないのです。

「はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」―厳しい言葉のように聞こえるでしょうか？　そんなことはありません。これは、**招きの言葉**です。赤ちゃんの委ね切った姿、幼な子の、打てば響くような素直さを見ればわかるでしょう、**あなたの中にある「子ども」**を大切にして下さい。それは、あなたの中核にある**「魂」**だと思います。そこに語りかけている主の言葉に素直になって行きたいと思います。そこには「大人」も「子ども」もないんですね。

お祈り致します。

主なる神様、今日私たちはこの場に集められて、幼な子たちと一緒、またその親御さんたちと一緒に、あなたの祝福に与ることが出来ましたことを感謝致します。私たちは誰一人、自分の意志と力でこの世に生まれて来た者はおりません。私たち一人ひとりの命にあなたのご意志があり、また、あなたの愛、また親の愛、周囲の者の愛がそこにあり、それを呼吸しながら生きている私たちです。確かに、この世の中は色々変化し、また人間の思いも弱さや罪をもっている限界ある者でありますが、あなたの変わらない十字架の愛の中を受け、またその愛に慰められ励まされながら、「共に生きる」私たちとさせて下さい。そこに「神の国」のひな型が実現していることを信じます。特に、幼な子たちの上に、あなたの格別の守りと祝福を注いで下さいますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。